

保科孝一先生御葬儀の記

本学会名誉会員保科孝一先生は本年四月六日より御発病、十六日病床につかれ、四月三十日国立東京第二病院に入院された。御病氣は胃がんで、連日輸血で永く重態の狀態を続けられた。五月二十六日勲二等旭日重光章叙勲の榮譽を賜り、七日二日午前六時二十分長逝された。静かに瞑目されて、真に大往生であられたという。宝光院殿顯学孝道大居士と戒名された。ここに行年八十三歳の天寿を全うされたのである。

葬儀は七月七日正午から青山葬儀場において厳肅の氣の中に取り行われた。葬儀委員長は左近司政三殿、副委員長は佐伯梅友博士、熊沢竜殿が当られた。当日は故人の生前の業績を追慕して千余に上る会葬者の参列があった。まず文部大臣松村謙三殿、国語審議会長土岐善磨殿、東京教育大学学長柴沼直殿、東京教育大学国語国文学会会長佐伯梅友博士、など各位の弔辞があり、また学士院理事長山田三良博士、日本倶楽部岩田宙造博士など各位の弔詞捧呈があった。

故人と長い間の交際を持たれた佐佐木信綱博士はわざわざ熱海から上京され、御出席になって、靈前において弔歌二首を献ぜられた。その他、金田一京助博士、西尾実殿、時枝誠記博士など学会会員参列者多数しめやかな焼香が行われた。

また春日政治博士、遠藤嘉基博士など各地の学会会員各位から数百通に上に弔電が寄せられ、靈前に披露された。新村出博士の御弔電も感銘が深かった。

古へに恋ふれば悲し君とともに

国語の道に携はりし日を

葬儀に掲げられた「故保科孝一の霊」なる銘旗は諸橋轍次博士の御執筆で、眼の不自由な諸橋博士の特に故人のために筆を取られたものであるという。

保科孝一先生は明治五年九月二十日山形県米沢市に誕生され、明治二十七年第一高等学校を、同三十年に東京帝国大学を卒業され、明治三十四年に東京高等師範学校教授、兼東京帝国大学助教に任ぜられ、昭

和五年東京文理科大学教授となり、十五年東京文理科大学を退官され、正三位に叙せられ、東京文理科大学名誉教授となられた。その間、東京女子高等師範学校、早稲田大学、立正大学等において長く、教授・講師を兼任された。国語学上の業績は周知のところ、我が国最初の国語学史の著を公にされ、言語学書の翻譯などもあり、後、国語教育国語国字問題等、實際的な運動に向われるに至って長くこれに尽悴された。先生が国語政策の上で一大啓蒙運動を起され、今日に見られるごとき大きな成果を挙げられたことは、万人の知るところであり我が民族と我が国語の存する限り、政策上の立場の相違のいかん、成果の価値判断のいかんを越えて先生の名は長く不朽のものとなるであろう。謹んで先生の御厚福を祈り奉る。

国語問題五十年の心境をよめる。
敷島のやまと言の葉もりたてて

孝一
国の礎とはにかためむ

(中田祝夫記)